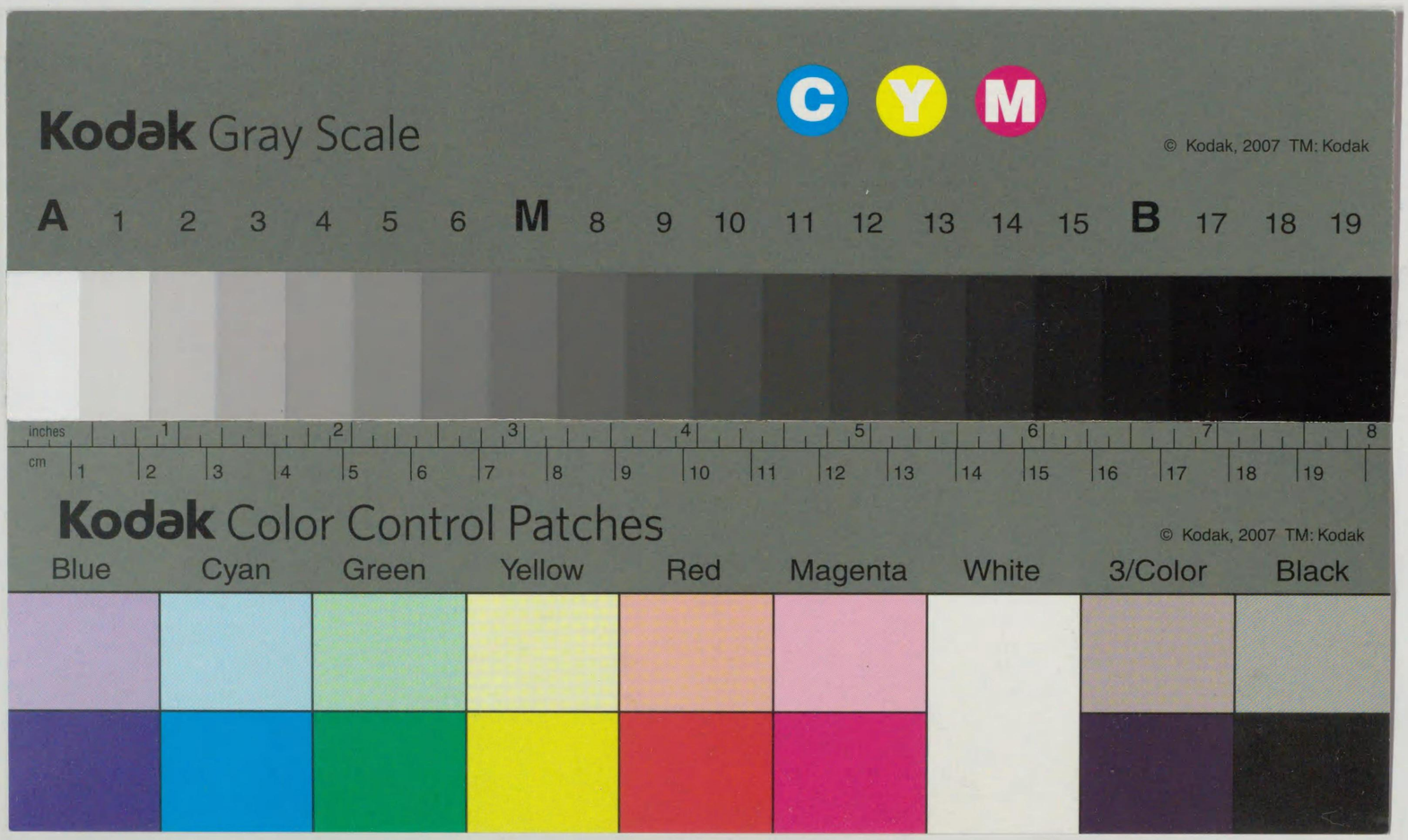

716
95
716-95
12005015863 72

◇聖典講讃全集

第一卷　三經七祖之部（上）
第二卷　三經七祖之部（下）
第三卷　親鸞聖人之部（上）
第四卷　親鸞聖人之部（下）
第五卷　覺如上人之部
第六卷　存覺上人之部
第七卷　蓮如上人之部・眞宗聖典解說

第一卷 三經七祖之部 上

大無量壽經

花田凌雲

大無量壽經

花田凌雲

昭和十三年十一月 本會藏書

目次

序言……三
第一章　異譯及章疏……四
第二章　題號及序分……八
第三章　發願修行分……一六
第四章　彌陀果成分……二九
第五章　衆生往生分……三四
第六章　釋迦勸誡分……四四
第七章　流通得益分……五二

序言

此講述を假に要義と題するも、文を離れて要義を記述したるもので無く、これ程の內容で、可成大經の分るようにと云ふ企圖に成つたもので、或は文に就き或は文を離れ體裁が整ふて無いが、經文を對披して讀んで頂きたい。講讀の體をなして居ないから本全集の一篇たるに相應しくないが、感興的に取扱いたくなかつたので、此點も恕して欲しい、多少とも宗義討究の一端にもと思ふたのである。

第一章　異譯並に章疏

抑も『大無量壽經』といふ經典は『華嚴經』や『法華經』や若くは『般若』の諸部の如き、高尚なる理論を說いた者では無い、一代佛敎の宗敎的神髓の發露が卽ち此經である、種々の哲理を弄ぶ如きは宗敎としては勿論第二義に過ぎない、此經は迂遠なる理論の域を超脫せる釋尊出世の正意である。故に微細なる理論を好む者は此經に就て求むべきで無い、佛敎の眞髓に直接しようと思ふ者は、敬虔なる態度を以て此經の慈誨を仰ぐべき者である。讀經者先づ以て此點に注意せざれば、到底此經の眞價を知る事は出來ぬ。

此經を讀むものは、異譯諸本にも注意する必要がある、高祖も數々異譯を引用せられてある。併しこれは正依經の深意を助顯する便宜に供せられたもので、固より他譯を以て今經に代ゆるのでは無い。【五存七缺】　此經の異譯は五存七缺と稱せられてある、これは開元錄に四存七缺を列ねたるを以て、是に宋譯を加へて五存七缺といふのである。卽ち（一）佛說無量淸淨平等覺經　後漢支婁迦讖譯（二）佛說阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經　吳支謙譯、普通大阿彌陀經と稱するもの（三）佛說無量壽經　曹魏康僧鎧譯（四）無量壽如來會　唐菩提流支譯（五）佛說大乘無量壽莊嚴經　宋法賢譯、これだけが存經で、此外に（一）佛說無量壽經　後漢安世高譯（二）佛說無量淸淨平等覺經　曹魏帛延譯（三）佛說無量壽經　西晉竺法護譯（四）佛說至眞等正覺經　東晉竺法力譯（五）新無量壽經　東晉佛陀跋陀羅譯（六）新無量壽經　宋寶雲譯（七）新無量壽經　宋曇摩密多譯ありて缺本になりてあるとのことであるが、五存は確かに存すれど七缺はどうか分らぬ。何となれば現存の『平等覺經』を帛延譯と見る學者も少くない、高祖も亦たそうである、現存の『大無量壽經』を法護譯とする學者も亦少くない、『往生要集』にも此說がある、缺と存と同本かも分らぬ、また憬興の『述文贊』に支謙譯と指すものは現存の『大阿彌陀經』では無い、要するに今日にて確かに知ることは出來ない。近代では印度所傳の梵本あり、別に西藏譯蒙古譯も傳はつてあるので六存とか八存とか言へるであらう。印度所傳の本は英譯及和譯あれば誰にでも參考し得る。是の異譯が同本の譯か異本の譯かは、斯道の學者に非れば斷じ難いが、何れにもせよ魏譯大無量壽經は祖承の依憑なれば、他本は是が助顯の爲めに用ゆべきである、相承の擇法眼を捨つれば眞宗は無い、而してまた此譯本が最も完備せるものなることは誰にでも首肯される。

此經の印度に於ける流傳は史乘の徵すべきものが無い、併し『起信論』の修行信心分の淨土往生の章句が、大經の文を依用せるに似たる、『易行品』の百七佛の列名が現流梵本大經の過去佛列名に少からず一致してる點など一寸面白い聯想が起る。支那にては安世高の此經の譯ありとすれば隨分夙くより傳はつてあつた、隋唐の時代には觀經が盛に流行して、共に淨土敎の正依として行はれた、此間に有力な章疏が數々出來たのを見ても、盛に

尊奉されてあつたことが分る。日本にても舒明天皇十三年に宮中に此經を講ぜしめられた事實により、餘程早く傳はつたことが分る、支那ではこれが丁度道綽禪師の時である、其後各宗の間に淨土教義の浸入を見るに至りては、觀經と共に盛に流行したものである。

此經の釋としては『論』及び『論註』は勿論、七祖の聖教及び本典皆これならざるは無い、是等の指南により て經意を見ることが出來る。併しこれは宗經の述作で釋經の體裁では無い、文段を追ふての章疏としては、支那に在りては隋の淨影寺慧遠の『無量壽經義疏』二卷唐嘉祥寺吉藏の『無量壽經義疏』一卷、新羅元曉の『無量壽經宗要』、唐憬興の『無量壽經連義述文贊』等で、日本に在りては高僧方の著作として餘り傳はつて無い、黑谷上人の『大經釋』は普く世の知る所である、それ以來末流の著作に止まつてあつたが、近時鏡如宗主『大無量壽經義疏』刊行あり、學徒を益せらるゝ所甚だ少なくない。支那諸師の述作にては憬興師の釋は本典にも引用になつてある、すべて隋唐の高德は甚だ眞面目である、述作が輕浮で無い、依用すべき點多々である、必讀を要する。然し他力絕待の經意に暗い爲め、願力は認めながらも機類各別の往生を談じ、爲めに佛土を判ずるにも報應と曰ひながら、隨類示現と判じ、壽量に限極を立つる等。若くは凡夫所入を以て、下位の凡聖同居と認め、或は化土と判じ、低位の佛土たるを見て却て易往を喜ぶ等の種々の謬見に陷るもの多し。これ等の點に於ては砂石相混ずる無きに非れども、偶以て我が諸祖の卓見を反顯するものありて、大に趣味がある。夫れ、淨影は地論の宗匠、嘉祥は三論の祖師、智顗は天台の明師、元曉は華嚴の巨匠、而して慈恩の法相に於ける、法聰の律宗に於ける皆一宗の祖宗である、自家の宗義を混ずるの憾ありと雖も、心を淨邦に懸けて去行に念佛を捨てざるもの、誠に敬慕に値する。假令その他力義に對する見解は低いにもせよ、少くも解學を弄ぶので無く、これが自己の信念である、輕々しく批評すべきでは無い。日本に在りても良源、珍海、永觀、忍空、良遍等の諸師各自宗の名匠として、而かも往生淨土の述作を殘して後世を引き、其他往生を期願せる名僧は數ふ能はざるものがあつた。それ等は純粹他力義を得られなかつたにもせよ、淨土門としては崇敬すべき人々である、學者は是等先賢の跡を訪ふことも必要である。

第二章　題號及序分

佛說無量壽經　　曹魏天竺三藏康僧鎧譯

【經題】經題は凡て法義を顯はすもので甚だ容易で無い、觀經の如きは佛に問ふて名付けた名である。佛說とは佛の自說なるを顯はす、佛法には弟子や諸天等の說がある、此經は化主釋尊大寂定に住して自ら說かれたので佛說と冠する。無量壽とは本佛の別號を以て此經所顯の法門を總該したのである、無量光と言ふも可なれども、今は體に就て譯したのである。五存經の中單に佛名を以て題するもの漢、魏、唐の三譯にして、吳譯は佛と法とを標し宋譯は法と佛と土とを並べ標してある、現流梵本は國土を以て名を立てゝある。如何に本佛の名字を以て代表すべきかといふに、此經は首尾を通じて彌陀法を說くの外はないからである。經とは常なりで、變改すべからざるを意味し、佛說に名くる名前になつてある。譯者の傳は之を略す。

我聞如是一時佛住王舍城耆闍崛山中乃至如是之等菩薩大士不可稱計一時來會

【三分科節】總て佛經は序分正宗分流通分の三段より成立ちてある、序分とは經を說くの由序で、何等かの由序がなくては說經は出來ない、由序既に興れば正しく所說あり、これを正宗分といふ、正宗分の所說既に終れば、其經の勝德を擧示して後世の奉行を勸め付屬傳持無かるべからず、是を流通分とする。今經の序分は大衆の來會、五德の現相等で、經の始より對曰唯然願樂欲聞まで、正宗分は本佛の因願果成、釋尊の發遣指勸の說相で、我今爲汝略說之耳に至るまで、流通分は彌勒大士の付屬及び得益の說で、佛告彌勒共有得聞より經末までゝある。この三分の章段も古師必ずしも一樣では無い。璟興師の述文贊などでは一時來會までを序分とし、爾時世尊以後を正宗分としてある、是非する程の事で無い、今は近く黑谷上人の大經釋に依つて章段を分つたのである。【證信序】序分の中また二大段がある、之を證信序・發起序と名くる。黑谷上人の『大經釋』によりて之を分てば始より一時來會に至るまでが證信序で、爾時世尊から願樂欲聞までが發起序である。善導大師の『觀經義』の科節に準ずれば我聞如是の四句を證信序とし一時佛住以下を發起序とすることになる、要するに釋家の意樂で別に法義に關することで無いから、今は大經釋の分科に從つてをく。證信序といふ名は信を證するといふ意義で、此中には佛經としての必須なる六事成就の記述を含み、以て末代の證信に供することになつてある、この體裁は諸經に通ずるを以てまた通序とも名くる。

【六事成就】とは聞、信、時、主、處、衆の六である。一に聞成就とは結集者親聞の說なることを標する、我聞の二字卽ちこれである。二に信成就とは所聞の法に錯謬なしといふ信を標する、如是の二字卽ちこれである、大論の一に問曰諸經初何故稱二如是一答云佛法大信信爲二能入一如是者卽是信也と曰へり、善導大師の『玄義分』には

深意を尋ねて三釋を設けてある。三に時成就とは說經の時正に到れるを指す、一時の二字卽ちこれである。四に主成就とは弟子衆のみの集合で無く能說の敎主在せしことを標す、佛の一字卽ちこれである。五に處成就とは說法必ず處所なかるべからず、住王舍城等の九字卽ちこれである。六に衆成就とは說法必ず聽法の大衆無かるべからず、而して其の聽衆の何によりて敎法の如何を定むることゝなるので、最も必要なる記載である、與大比丘衆千二百五十人より一時來會までの記述卽ち聽衆の說明である。大論の二によれば佛告二阿難一我法寶藏初應レ作二是說一如是我聞一時佛在二某方某國土某處林中一等とあり、されば六事成就の記載は佛勅による遺經結集の樣式である、成程この記載が無くては末世の信を繫ぐことは出來ぬ。

【列衆】衆成就卽ち聽法の列衆を擧ぐること諸譯種々にして同じからず、漢譯最も詳で大弟子、菩薩、比丘尼、淸信士、淸信女、欲天子、色天子、遍淨天、梵天を列ね、所謂五乘の機を悉してある、其他は多く聲聞衆菩薩衆のみを列ねてある、正依魏譯も聲聞衆を擧げ次に菩薩衆を擧げ、菩薩の嘆德に至りて頗る力を用ゐてある、嘆德の委しいことは魏譯を以て第一とする。是には各所顯のあることゝ思はるゝ、漢譯にては五乘齊入萬機普益を標する爲に詳かに五乘の名を列ね、魏譯にては大小聖者を擧げて盛に其德を嘆じ、以て此經の尊勝なるを標する、勿論人天等の凡夫が居なかつたといふで無いことは、得益分に至りて之を列ねてあるので明了する。これ等は異本の對照によりて面白い義理が分る。

さて與大比丘衆より上首者也までは聲聞衆の列名である、この萬二千人は皆神通已達の聖者で、列名の三十一名は殊に此中の長老である、但しこの中で阿難尊者のみは有學果の人であつたと現流梵本には記してある。次に又與大乘衆菩薩俱以下は菩薩衆を擧げたのであるが、此の列會の菩薩は非常に勝れた人々で、先づ普賢文殊彌勒の三大士を擧げてある、彌勒は補處の菩薩、文殊、普賢は深位の大聖、華嚴以來の大立物なので、この三大士の參列は法門の尊高無比なるを標する。この外賢劫成佛の菩薩、賢護菩薩等の十六正士、善思議等の諸大菩薩あり。而して其の德相を嘆ずるに至りて容易ならざる說相になつてある。先づ最初に皆遵普賢大士之德とあり、普賢德といふは淸涼の釋には果無レ不レ窮曰レ普、不レ捨二因門一曰レ賢と曰へり、卽ち極果に達したる大菩薩、因行を捨てずして衆生を救濟するをいふ、華嚴經の普賢十大願卽ちこれである、その一々の願に、法界の衆生をして阿彌陀佛の極樂世界に生れしめんと願ふてある。今經還相の願文に對照すれば、普賢之德は明かに還相攝化の德相である、衆生濟度の爲めに菩薩行を捨てざる大聖の善巧である。善導大師の『往生禮讚』に觀音菩薩大慈悲已得二菩提一捨不レ證と曰ひて觀音の德相を嘆ぜるも亦此意である。而して列會の大菩薩皆この普賢之德に遵じて無量の行願を具するといふが嘆德の起筆である。此の如き大菩薩の行化の相として先づ擧げられたるは八相成道の化儀である、處兜率天より植衆德本に至るの文に、釋尊一代の化儀を擧げ、以て菩薩の遊步十方行權方便の相狀を示してある、處兜率天弘宣正法は處天相、降神母胎は托胎相、從右脇生より天人歸仰まで出胎相、示現算計より色味之間まで

在家相、見老病死より行如所應まで出俗相、現五濁刹より成最正覺まで成道相、釋梵祈勸より成等正覺まで說法相、示現滅度より植衆德本まで涅槃相を明してある。其他或は菩薩行を修し、或は佛行に住し、諸衆生を開化するに日夜を捨てず自利々他の德相成滿せる有樣を說いてある。之を要するに列會の菩薩は皆普賢の德を修習して權實二智自他二利を滿足したる大聖たることを顯はすものなり。而して之を顯はすに聖道一代の化儀を以てするもの自から此に斯經の尊高遠く一代諸敎に超え、斯經の眞實全く八萬四千の方便敎に異ることを詮顯したるものである。聖道一代を以て大無量壽經化前序の分齊と見れば、方便と眞實との對照を成し、還相攝化の願功によれる、修習普賢の相と見れば、一代諸敎該攝して斯經の妙用となる。此の如く列會聽衆の優劣及その嘆德の如何は、該經典所顯の法門の權實眞假を定むる一の要件である、今經の序分深く佛意を體して衆成就の記載を詳にしたるは末代の大に感荷すべき處である。

爾時世尊諸根悅豫姿色淸淨乃至阿難諦聽今爲汝說對曰唯然願樂欲聞

【發起序】この一節を發起序と名くる、正しく正宗分の說法を發起する由序である、この由序は、斯經特別の事緣なればまた別序ともいふ。抑も大聖世尊攝化の時機方めて順熟して、大小の聖者不可稱計の有緣の五乘、今正に如來の坐下に來詣して妙法を聽かんことを期待して居る、世尊此に諸佛出世の本意たる彌陀弘願の一法を開顯せんと欲し、方さに大寂定に住して正道を思念せらる、世尊の諸根自ら悅豫の相あるや必然なり。悅豫の相を說くに今經は頗る略である、諸譯は凡て詳細である、對披して見るべし。【阿難請問】此に於て常侍の弟子尊者阿難世尊に何故に爾かく諸根悅豫なりやを問ひ奉る。この如來の威相を問ふて經の發端を爲す例は他經にも少く無い。『法華經』の序品の如きもそれである、佛無量義處三昧に入り給ふや散華放光等の非常の奇瑞が見はれた、そこで彌勒菩薩思念せらるゝよう、この稀有の奇瑞誰れに問ふべきか、文殊師利は已に過去無量の諸佛に親近し來つた大士である、必ず之を說明し得るであらうと、直ちに文殊に問はれた、これが法華序分の現瑞である。然るに是に比すると今經の說相甚だ振つてゐないように見える、現瑞の相も法華程に委しくないが、それは文字の具略としても、問者に非常の相違がある、彼は補處の大菩薩、此は有學の聲聞假令常隨の弟子といふも智見の程が比較にならぬ。阿難は未曾瞻睹と言ふも常侍以來數十年に過ぎず、また言ふに足らぬ、言はゞ阿難の淺智に不思議に思はれて、大菩薩には何でも無いことでなかつたか。處が今經の阿難の啓請は阿難自己の啓請で無い、承佛聖旨の啓請である、淨影の釋に承佛聖旨彰二所請依一旨謂意旨、此承二如來意力加被一故興二諸問一と、佛の威神力阿難をして啓請せしめたのである、現流梵本には、明かに「如來へ問ふべき此義を考ふるも是れ實に如來の威神なり」と說けり、卽ちこの問答は要するに世尊の自問自答である、佛の自問自答を用るは因位不可測の法門なる所以である。而して次に佛より阿難の自見か否かを問ふて、阿難が諸天の來り敎ふるもの無しと答へたる一問答は、此の啓請は佛力に加被せらるゝ外、誰にも爲し得ない至要なる事柄であると反顯したものである、現流梵本にて

はこの問答の後に如來の威神力による旨を說いて、この意味がよく分る。

【佛の嘆問】此の如く阿難佛力の加被によりて現瑞の意義を問ふて佛所念の法門を質す、この問が弘願開顯の大因緣となる、卽ち佛をして本懷開顯の端緖を得しめ、一切大小凡聖の群類をして出離得脫の妙法を得しむることになる。故に今經では所問甚快發二深智慧眞妙辯才一愍二念衆生一問二斯慧義一と、世尊の稱嘆を短かく說いてあるが、漢譯等には利益衆生の相を詳說し、唐譯にては更に汝爲二一切如來應正等覺及安住大悲一と說きて佛の爲めに問ふたことも嘆稱してある。【出世正意】此に於て佛先づ如來以無蓋大悲等の說ありて、將に微妙の法門を說かんとするの前提と爲す、この中如來以無蓋大悲より眞實之利に至るまでは、如來出世の本意は、將に說かんとする弘願の大利に在るを示し、無量億劫難値難見等は斯法の難遇を示し、如來正覺等は佛智の無窮を嘆じて此の如き佛智にして始てこの妙法を說くと示されたのである。『如來會』の此章段に如來應正等覺善能開二示無量知見一何以故如來知見無有障礙とあり、對照して文意を見よ。斯經の說が出世の本意であるといふことは經文に在りて明である、經文を點讀すれば「如來は無蓋の大悲を以て三界を衿哀す、世に出興する所以は、道敎を光闡して、群萌を拯ひ惠むに眞實の利を以てせんと欲してなり」と、道敎の二字は今經の用例、證信序の普現道敎及び下文の宣布道敎、廣宣道敎等廣く聖道一代を攝す、眞實之利の言は下の爲得大利に對し、弘願念佛の利益を指す。されば佛の世に出でゝ一代諸敎を說くは群萌を拯ふて弘願念佛眞實の大利を惠まんが爲なりとの文意である。凡そ佛の說法は戲論を弄せず、一に衆生拔濟の外はない、故に義理の淺深高下は必ずしも問ふ所で無く、群機を攝するや否やが所詮である、華嚴法華の妙理如何に幽玄なるも利智精進の機に局る、弘願一乘の五乘齊入萬機普益なるに比して、何を以て佛出興の本意と言はれよう。のみならず、一代諸敎は普賢權門の化儀なれば、弘願法開演の爲の調機方便に止まる、佛は彌陀法を說かざれば化事完からざるものである。『如來會』に曰く如來所レ應〻作者皆已作レ之汝等應當レ安二住無疑一等と、これ經末に至りて、既に法門を開顯し終りて深く責務の果されたるを善び給ふ言である、卽ち彌陀法を說くことは如來所應作者である、三世諸如來の責務であると示されてある。『小經』には舍利弗當知我於二五濁惡世一行二此難事一得二阿耨多羅三藐三菩提一爲二一切一世間說二此難信之法一是爲二甚難一と說き給ひて、自ら此法によりて作佛せしことを示さる、佛意よりて以て窺ふべし。

斯くて佛は一甚深微妙の法を說くべきを前提して、阿難に諦聽を命じ給ひ、阿難謹んで願樂欲問と啓向するに及び、發起序は完了した譯である。

第三章　發願修行分

佛告阿難乃往過去久遠無量不可思議乃至攝取二百一十億諸佛妙土清淨之行

【發願】これより以下正宗分。釋尊正に彌陀法を開顯せんとす、必ず先づその因位發願の當初より說くべきである。此の一章は卽ち法藏菩薩發心の初より諸佛刹土の麤妙を選擇して、無上の大願を建立し給ひし相狀を說いてある。【過去佛列名】法藏菩薩發願當時の師佛は世自在王如來と名づく、然るに經說は更に過去に溯りて錠光如來の出世より起る、過去久遠無量不可思議無數劫に錠光如來の出世あり、次第相次ぐこと五十有三佛で世自在王佛に至つたと、蓋し何の爲めに說いたのであらう。嘉祥師の一義には明下衆人同値二多佛出世一然法藏一人能超越而發心修行以成中佛道上と曰ひ、法藏發心の世に超えたるを示すものとし、憬興師は從彼佛以來五十四佛頻興レ世故云爾、從二錠光一來漸有二攝受淨土行一故と曰ひて、法藏の發願其の源甚だ遠きことを示すものとしてある、流石に名家の釋である。其後の飜譯に成る宋譯『莊嚴經』の得益分に各有二八萬俱胝那由陀人一得二然燈佛記一名二妙音如來一當レ得二阿耨多羅三藐三菩提一彼諸有情皆是無量壽佛宿願因緣俱得レ往二生極樂世界一と說き、現流梵本にまた八十俱胝那由陀の有情提和竭羅如來の所にて得忍し無量壽佛に由りて成熟せらるゝことを說いてある、提和竭羅譯

して錠光、然燈又は燈作に作る。是等の經意に依れば法藏菩薩及び得益の衆生共に錠光以來の因緣を有する、でこの過去佛の列名はその久遠の因緣を說いたものと窺はるゝ、尙ほ學者の討究を待つ。さてその次に世自在王佛の出世となり、その時の國王、佛の說法を聞て無上正眞道意を發し出家して法藏と名づく、法藏の梵名曇摩迦留或は曇摩迦に作り、譯して法藏又は法處及び作法に作る、卽ちこれ阿彌陀如來因位の御名前である。

【法藏の啓請】然るにこの無上正眞道意は尋常の發心では無い、一切度脫の發心である、故に師佛に啓請して敎を受け願を建てんと欲し、佛所に詣して先づ身業の恭敬を致し、偈頌を以て口業に佛德を讚嘆し奉る、斯る場合に先づ偈讚を用ゐる事は菩薩の通儀で、諸經の所說多くは此の如くなつてある。今の讚佛の偈頌は光顏巍々等の偈文で、此偈の中、光顏巍々より震動大千に至るまでは師佛三業の德相を嘆じ、願我作佛以下は菩薩自身の所願を啓白せられたのである。所讚の佛德の如く我も亦た作佛して聖法王に齊しく、一切の恐懼ある者の爲めに大安と作り、國土は第一にして等雙なく、一切衆生を度脫して快樂安穩ならしめんとの願で、之に就て佛の證誡を求め、諸苦毒中にも我行は精進ならんと誓ひたるを讚佛偈の起盡とする、これ蓋し次下の大願を略叙して豫め心中の希望を啓白せられてある。【師佛說現】偈頌既に畢りて佛に廣宣經法を求め、令下我於レ世速成二正覺一拔中諸生死勤苦之本上と請ふ、速成正覺は何の爲である、拔諸生死勤苦之本の爲で、自利の正覺全く利他の方便に過ぎない、修行段の令諸衆生功德成就の句と對照して大悲の至極を顯はした章句である。この廣大の志願に對して師佛

は直ちに法を說くことなく汝自當知と仰せられた、菩薩は更に非我境界として敎を請はれたので、師佛は廣く二百一十億の諸佛刹土の善惡麤妙の因果を開說し、加之、心願に應じて盡く現前に之を見せしめた。此の師佛の一度答へなかつたことゝ、菩薩再請を重ねたことに就ては勿論意義がある、嘉祥師の釋には彼佛推二其自解一不二肯爲說一意欲レ顯二法藏德一也と曰へり、知らぬ者に知つて居ると責る筈は無い、卽ち師佛直ちに請問に應じなかつたのは法藏比丘內德甚だ尊高なるを標するものである。法藏發願の地位に就ては支那の古師種々の異說を設けてある、論註には地上の菩薩としてある、必ずしも地位を局るを要せずと雖も其の內證は深位の大聖なること此一句に於て明である。然るを尙ほ再請せらるゝ所以は、自己の智德を謙下すると共に、且つは大願選擇の頗る重きを顯はすものである。斯くて法藏菩薩は師佛說現の諸佛刹土に就きて、五劫の思惟選擇を經て、次に述べたる超世無上の別願を建立せられた、具足五劫思惟攝取莊嚴佛國淸淨之行の句卽ちこれである、深位の大菩薩、五劫の長時間を經て而して攝取せられたる所以は、無上殊勝の願、其の甚だ容易ならざるに由るものである。

然るにこの選擇といふことが普通に選び出したといふ意義では無い、論註の二十九種莊嚴の一々に細釋せられた如く、また選擇集に選擇の相を詳述せられた如く、建願の側は凡て他の缺點を排除して自己心中の所願を以て し給へるもので、元來が超世の心願よりするのであるから、諸佛通相の莊嚴淨土の行に目の止まる筈は無いのである。で、暫く名を選擇攝取に假ると雖も、其實は諸佛通相の麤妙は選捨に歸する、他力絕待の因果より見るときは、十方法界固より倫匹あるべき理は無い。現流梵本には此意を明言して「五劫波の間に十方一切世間に曾て有ること無き殊勝成滿なる佛國の功德嚴飾莊嚴の成滿を攝取し殊勝の願を發起せり」と曰ふ、選擇の義旨思ふべし。

如是修已詣彼佛所稽首禮足乃至　如是大願誠諦不虛超出世間深樂寂滅

【發願の啓白】法藏菩薩五劫の思惟を經て、超世の大願を建立し給ひしを以て、之を師佛に啓白せられた、この一節の始終卽ちこれである。如是修已より淸淨之行に至るは、菩薩建願の畢れるを啓し、佛告比丘より無量大願に至るまでは、師佛其の啓白を促し給ふたので、そこで法藏比丘師佛の下、一切大衆の中に在りて、敢て廣大無比の誓願を宣述せられたのである、卽ちこれ四十八願にして彌陀法の源泉である。

然るにこの願文は各譯に頗る具略がある、漢吳兩譯は二十四願を列ね、宋譯は三十六願とし、唐譯は魏譯と同じく四十八願とし、現流梵本は四十六願とす、これを對照するに、漢吳兩譯最も缺減多く、宋譯之に次ぎ、現流梵本之に次ぎ唐譯は句の異同はあれど魏譯と同じい。それから他經ではあるが『悲華經』所說の彌陀の願文は、漢吳兩譯よりも詳細で、宋譯と對比して讓らざる內容がある。是等の異同を對檢することは最も必要なる宗學上の研究には相違無きも、流石に祖々擇法眼の同じく認め來れる魏譯の、文義最も周到明截なるは爭ふべからざる所である、言ふ迄も無く正依を助顯するまでに異譯を依用するで無くてはならぬ。

【四十八願の區別】四十八願を大別して攝法身の願、攝淨土の願、攝衆生の願とする淨影『義疏』の釋は分り易い分類である、嘉祥『義疏』の釋は淨土、法身、眷屬とし憬興『述文贊』では求佛身の願、求佛土の願、利衆生の願と名目を改めて之を襲用してある。攝法身の願とは佛自證を誓はれたので第十二、第十三、第十七の三願、攝淨土の願とは淨土建立を誓はれたので第三十一第三十二の兩類、攝衆生の願とは衆生利益を誓はれたので餘他の四十三願とする分け方である、但し嘉祥師は第一願を淨土の願に攝する。若しまた『淨土論』三種成就願心莊嚴とある意味から三種莊嚴の願として分別したならば、國土莊嚴功德の願が第一第三十一第三十二の三願で、佛莊嚴功德の願が第十二第十三第十七、第十八第十九第二十の六願で、菩薩莊嚴功德の願が餘他の三十九願となる。斯く論と經とを對照すると論は國土に詳にして菩薩に略で、經は全く之に反する、それで國土莊嚴の十七種を論註の之を釋するに方りては、十七種の選擇の建願となりてある、經文の僅かに三願なるに比して、一寸四十八願以外の如く見ゆる。併しこれは具略で、論は觀察に約して國土に委しく、願は攝化衆生の本意を明にして衆生に委しいのである、固より四十八願は不可稱不可說なるもので、高祖は無邊無礙と釋せられ、其實は無量の大願である、啻に經の三願が論に十七願と開かるゝのみで無く、若し廣說せば無量に及ぶべきである、廣略は自由に出來る譯である。

斯く一應は分別すべきも、願意もと佛の正覺を全ふして衆生の往生を成し、自利卽利他なるが故に、四十八願全體が攝受衆生の願ともなり、また佛莊嚴の願ともなり國土莊嚴の願ともなる、善導の釋に四十八願攝受衆生と曰ひ一々誓願爲衆生と曰ふが如き、また四十八願莊嚴起超諸佛刹最爲精と曰ふが如き、又發四十八願乃至今既成佛卽是酬因之身也と曰ふが如き、夫々の釋が設けらるゝ所以である、互攝互融以て攝化の大事を成ずるものなれば、願心より見るときは之を要するに攝受衆生の一に結歸する、善導大師の巧釋一々願言若我成佛等と言へるもの眞に經意を開顯し得て、末代の明燈と稱すべきである。黑谷上人の釋には四十八願皆雖二本願一殊以二念佛一爲二往生規一乃至故知四十八願之中既以二念佛往生之願一而爲二本願中之王一也とあり。此に至りて第十八願を以て全く攝盡する。【諸祖の本願引用】凡て淨土法門の淵源は合すれば第十八願開けば四十八願に存する、併し祖々その法門を說くに其揆必ずしも同じからず。先づ龍樹菩薩に在りては第四十八願によりて、稱名易行を立て、阿彌陀佛本願如レ是若人念レ我稱レ名自歸卽入二必定一等と釋せられ、次に天親菩薩は偈に觀佛本願力遇無空過者と釋し、註論の釋意によれば十八願の聞名不退を指すものである。三に曇鸞大師は註の下に、凡是生二彼淨土一及彼菩薩人天所起諸行皆緣二阿彌陀如來本願力一故、何以言レ之若非二佛力一四十八願便是徒設、今的二取三願一用證二義意一と釋せられ、十一、十八、二十二の三願を以て該攝し、五念二利共に願力に依ると示さる。四に道綽禪師は安樂集に聖淨二門を判じ、其淨土門を釋し捨此往彼を示すに十八願を標して他を攝す。五に善導大師は玄義分に發四十八願一々願言若我成佛等と釋して、四十八を第十八に攝歸して念佛往生を顯はし、觀念法門には十八、十九、二十、

三十五の四願によりて攝生增上緣を明さる。六に源信和尙は念佛證據の十文に別發一願として十八願文を引き念佛往生を證せらる、十九二十の兩願は、之を要集中末に連引せられてあるが、臨終十念の所期を證する爲めである。七に源空上人は善導大師を稟けて、十八願を特標して念佛往生を顯はされてある。要する所別途あるでは無いが、諸祖各願海の要義を開顯せらるゝので、縱橫經緯以て文を成すものである。高祖聖人に至りては經論釋の深意に由りて、願海に眞假を分甄せられ、惑行迷信の機に約して要眞兩願を認めらるゝ、これは上祖に明文無く、高祖發揮の法門である、要門の願とは第十九願、諸行往生である。眞門の願とは第二十願、自力念佛の往生である、化身土卷に明さるゝ所である。此の要眞兩門の假願に對して、第十八願の他力念佛の往生を眞願と爲す。而して法門の建立には五願を用ゐらる、第十七願を以て眞實行を明かし、第十八願を以て眞實信を明かし、第十一願を以て眞實證を明かし、第十二第十三兩願を以て眞佛眞土を明かさる、證果の中還相攝化を明すことは第二十二願を用ゐらるれば、また六願建立とも言へる。而してこの諸願は一の十八願に融入する、十七成就の名號は第十八願の所聞である、魏譯には略であるが唐譯では十八願に聞我名已の句あり、十一の必至滅度は、若不生者の生にして、十二十三の光壽無量はその果體の德相である、光壽二無量を若し本佛に約すれば、攝化の大本にして所聞の名號に攝し、衆生の果に約すれば、往生の德相である。

廣く願文を解することは今は之を略し、前記の諸願のみに簡短の說明を試みやう。【五願の連繫】　先づ衆生攝化の大旆は十方普流の名號である、五兆の願行を以て成就し給へる諸の善法を攝し諸の德本を具したる功德大寶海の嘉號である、此の嘉號を十方一切の衆生に聞かしめなくてはならぬので第十七の諸佛稱名の願を建てられたのである。十方世界の無量諸佛に悉く我が名號を咨嗟稱揚せられやうといふが此の願事で、重誓の名聲超十方究竟靡所聞はこの願の意である、大阿彌陀經の願文には令我名字皆聞八方上下無央數佛國、皆令諸佛各於比丘僧大坐中說我功德國土之善諸天人民蜎飛蠕動之類聞我名字莫不慈心歡喜踊躍とあり、名號を聞て歡喜踊躍せしむるための諸佛稱讚なり、今經に在りてはこの連絡は成就の文に明了である。卽ちこの願功によりて十方諸佛各其の國土に在りて稱揚讚嘆し證誠護念し給ふのである。行卷の願名の中前の三は直ちに願事に立つた名で、後の二名は所讚の法體から立つた名である、諸佛の稱讚によりて名號が往相廻向の大行と爲るのである。さて第十七願で名號普流を誓はれて之を衆生に聞信せしむるといふ順序になるが、その信心なるものが虛假不實の信心で無く淸淨眞實で無くてはならぬ、然るに凡夫には到底淸淨眞實といふことは出來ない、故に佛の方に信心成就して之を衆生に回向し給ふより外に仕方が無い、第十八願此に於て起つたのである。信卷に何故に如來三心の願を發し給へるやと問ふて、其答には、凡夫には淸淨眞實の心が無いから、如來不可思議兆載永劫に淸淨眞心を修しこの如來の至心を惡業邪智の群生海に施されまた一切群生は無明海に流轉して淸淨眞實の信樂が無いから如來の方で廣大無礙の淨信を成就して之を施され、また一切群生は煩惱海に漂沒して眞實の廻向心が無いから如來の

方で永劫所修の廻向心によりて成就せられたる利他眞實の欲生心を施さるゝのであると委しく釋せられてある。凡て佛邊に至心信樂欲生の三信を成就して衆生に廻向せらるゝから、大信心とも希有最勝の大信とも名けらるゝ、此の願を往相信心の願と名くる所以である。凡て信心は佛法の眼目であり因果である、涅槃經の大信心者卽是佛性佛性卽是如來の說、また菩提因雖二復無量一若說二信心一則已攝盡の說等によりて如何に信心が大切であるかゞ分る。然し佛性と名け如來と呼ばるゝ信心なるものは、容易のものでは無い、淸淨眞實金剛不壞眞如一實のものでは無くては、左樣の價値が有るべき筈が無い。そこで十八建願の聖意は、この大信心を成就して廻向しやうといふのである。然らばその廻向はどの場合に行はれ得るかといふに、聞名の一念である、正依經には略になつてあるが、如來會では聞我名已の句が挾んである、卽ち衆生では聞で受取る、十七願によりて諸佛稱讚の名號を、明かに生起本末を聞き屆けた時が、卽ち信心廻向である。故に衆生の方では一の無疑の聞名に過ぎぬ、そこに三信が成就する、この成就した三信は如來永劫の修行によりて成就せられたる廣大難思の大信である。乃至十念はこの信心相續の相である、相續心が口業に顯はれて稱名となる、此の稱名は、諸佛稱讚の名號がその儘顯現したのであるから選擇の大行である、衆生にありては念報佛恩の顯はれである、臨終一念の聞已卽滅の機ならばとにかく、然らざる限は必ずこの相續の名號を具する。斯く他力廻向の大信大行を具足するものは必ず往生を得しむるといふが若不生者の誓願である。然らば其の往生の果はどうなる、往生しても諸佛刹土の往生の如く三賢十聖住果報では他力の始終では無い、故に必至滅度を誓はせられた、第十一願の所誓は往生人をして利他圓滿の妙位無上涅槃の極果を得しむるので、實に超世不共の妙益である。尤も此の願には住正定聚の願事もある、然し正定聚といふは必至滅度に決定せる聚類といふことで、信心決定の刹那から涅槃の極果に到るまでの總名である、故に現益にも當益にも通ずる、勿論當益で談ずるのは五果廣門の說相で施設の法門である。卽ち願體は必至滅度を誓つたのである。而してこの必至といふは時劫を隔てゝ後に至ることではない、彼國の聖衆は皆虛無之身無極之體にして、無爲泥洹の道に安住して法性の常樂を證すること下の經說の通りである。然るに聖衆は究竟涅槃の內德を藏し菩薩位に留まりて淨土を莊嚴し、宜しきに隨つて衆生化益の大悲行に從ふ、其の融通無礙の作用を誓はれたのが第二十二願である。高祖は證卷に還相回向を開きて二十二願を標し給ふ、此願を必至補處または一生補處の願と名け、また還相廻向の願と名くれども、この補處位の菩薩からが還相の相狀である、必至滅度の聖衆が一生補處位に住するので從果向因の示現である。淨土に在りて一生補處の菩薩たらんも、また諸佛國に遊歷して種々の身を現じて度脫一切の利行を果さんも皆自由である、所謂修普賢德の作用を保障されたのが此願である。宋譯の願文には若有二大願一未レ欲二成佛一爲二菩薩一者我以二威力一令二彼敎一化一切衆生一等とありて、修普賢德は如來の威力に由ることを顯はしてある、正依の願文には除外例となりてあるが、下卷の文では往詣十方の菩薩皆佛の威神を承くると說いてある。修普賢德の相皆願力によること明である。さて此の如き勝れたる聖衆の身土は如何にとい

ふに、即ち眞佛土卷所明の光明無量壽命無量の眞報佛土である、其の眞報佛土を誓はれたのが第十二第十三兩願である。十二十三の兩願は本佛の光壽無量であるが、この二無量は唯佛一人で無く聖衆もまた同じである、勿論光壽二無量は佛の眞報身である、眞報身の土に入るものは同體の智見を得たるもので無くてはならぬ、聖衆の地位知るべきのみである。然るに眞佛土の願として他を指さず、十二十三の二無量願を引用せられたる高祖の釋は蓋し大に理由が無くてはならぬ、眞佛土卷の釋に言二眞佛一者大經言二無邊光佛無礙光佛一又言二諸佛中之王也光明中之極尊也一論曰二歸命盡十方無礙光如來一也、言二眞土一者大經言二無量光明土一或言二諸智土一論曰二究竟如虛空廣大無邊際一也、言二往生一者大經言二皆受自然虛無之身無極之體一論曰二如來淨華衆正覺華化生一等とあり、眞報の至極に居して身土を判ずるときは無量の光明即これ身なり土なり、衆生は即ち虛無無極にして實相の智に住す、正覺華化生なるもので些々たる身相莊嚴を論ずべきでは無い。四十八願中往生人の莊嚴や國土莊嚴の願あれども、要するに示現の莊嚴である、直に往生の證果を指すには必至滅度の一願を指すが如く、直に佛身佛土を指すには、願に在りては光壽二無量の願を指すのである。此の如くなるを以て光壽二無量の願は一面には能化の自證を誓ふもので、また一面には衆生所入の佛土を誓ふものである。以上略して五願の關聯を述べた次第である、若し更に之を開けば四十八願皆此に連繫するは論を待たぬ。【重誓偈】　次に重誓の偈、これは上來の結誓とも名くべきである、我建超世願より爲諸天人師までは正しく誓を述べ、神力演大光より等此最勝尊までは師佛の德を嘆じて之に等しからんことを願ひ、斯願若剋果等は誓を結んで請を請ふのである。誓を述ぶる中、初偈は超世願を滿足して必ず無上道に至らんと誓ひ、次の二偈は利他に就て別して誓を立てられ、次の一偈は修行の必ず果たすべきを誓はれたのである。斯くて此等の誓願が若し遂げらるゝならば、此に現瑞の證明を得んと願はれた、此の願心なるものは、實に無邊無限の大願心である、虛空を包容し法界を該攝した廣大難思の誓願である、何者か將た之に動かされぬものが有らう、果して現瑞の證誠を感じられた應時普地より無上正覺までの說相がこれである。現瑞に四あり普地震動、天雨妙華、自然音樂、空中讚言である。高祖は二卷鈔に三身證誠を列ね、前の師佛の證誠を化身證誠とし、十方如來の證誠を報身證誠とし、今の說相を法身證誠とせらる、空中と說きて有相の佛身を指さない、法身證誠とする所以である。既に證誠を感得せられたので、菩薩の誓願は動すべからざるものと爲つた、文に誠諦不虛と曰ふのである。

阿難時彼比丘於其佛所諸天魔梵乃至超諸天人於一切法而得自在

【修行】法藏菩薩師佛大衆の中に於て超世大願を告白して證誠の讚言を得給ひしかば、乃はち之に對する修行に不可思議兆載永劫を費された、その修相を說くのが即ち此一章である。文の中所修佛國恢廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變は所期の佛土を標し、於不可思議等はその修行の相である。その時劫を曰へば不可思議兆載永劫、その修相を言へば勇猛精進志願無倦、而してその期心を言へば以大莊嚴具足衆行令諸衆生功德成就である。勇猛精

進にして一念一刹那も倦むこと無く、不可思議兆載永劫を經て、一切衆生の爲めに積功累德せらるゝもの、蓋し大悲の至極に非ずんば堪え得ることでは無い、超世の大願を成ずるには必ず超世の大行を要する、大悲を滿足せん爲には必ず大苦行を須ゐる。散善義の釋には彼阿彌陀佛因中行菩薩行時乃至一念一刹那三業所修皆是眞實心中作とあり、凡夫畫水の想像を以ては到底その大海の一滴をも推し測り得べきで無い。而してこれ凡夫一人一人の爲めである、高祖は五兆の願行を以て親鸞一人の爲なりと仰せられた、よく〳〵感荷佛恩の思に住せねばならぬことである。

第四章　彌陀果成分

阿難白佛法藏菩薩爲已成佛而取滅度乃至如是諸佛各各安立無量衆生於佛正道

五劫兆載永劫の願行によりて成就せられたる、彌陀佛國の有樣を說けるもの卽ち此一章である。大略の文段を分てば阿難白佛より欲除其疑惑故問斯義までは、略して依正二報を明し、佛告阿難無量壽佛より其所不知如大海水までは別して本佛の功德を明かし、又其國土七寶諸樹より以下は別して國土の功德を明した說相である。

【略明依正】先づ略して依正二報を明す一段では、阿難の請問によりて、佛之に法藏菩薩の現在成佛なることを答へ給ふ、これ略して正報を標したのである、其佛國土自然七寶以下は、略して依報を標したのである。宋譯の文に曰く彼佛如來來無二所來一去無二所去一無レ生無レ滅非二過現未來一但以二酬レ願度レ生現二在西方一と、蓋し法身の體より言へば、來無く去無く生も無く滅も無し、度生の大願に酬ふて西方極樂世界に示現し給ふもので和讚に、無礙光佛としめしてぞ安養界に影現すると釋せらるゝものである、但し因願果成は實にして假に非ず、十劫の成道は衆生の往生を成就するものなれば、全く別願因緣の所成なるものなり。土を西方に指すは、遍法界の身土に卽して、有相の機を引かんが爲めに淨刹を示現し給ふものである、無相の故に相ならざる無く、無邊際に卽して西

方を示すのである、彼國に到り畢れば畢竟如虛空廣大無邊際である、指方立相は凡夫引攝の大悲である、佛意深く仰ぐべきことである。國土莊嚴を明すに佛神力故欲見則現とあり、これは須彌山等に限つたことで無く、諸種の莊嚴皆佛力によりて、自在に現ずる、唐譯には於二一切處一標式既無亦無二名號一唯除二如來所レ加レ威者一とあり、すべて如來の威神力によりて現ずる外、何等の標式も名字も無いといふのである、涅槃莊嚴處處滿なれば、凡情を以て思考すべきもので無く、不可思議の境界である、迷界の依正の如き不自由なものでは無い。

【佛功德】別して本佛の功德を明かす中、無量壽佛威神光明より晝夜一劫尙未能盡に至るは、光明無量の德を說き、無量壽佛壽命長久より非算數譬喩所能知也に至るは壽命無量の德を說き、又聲聞菩薩より如大海水までは伴德を具するの盛なるを說いてある。光明の德を明すに諸佛有量の光明に對して、十二光の嘆名を列ぬる、唐譯は十五光宋譯は十三光、現流梵本は十九光の名を列ね、漢譯は九句吳譯は十句の嘆稱を設けてある、但し具略のみ。次に光益を嘆ずる說相、漢吳兩譯は最も詳細に記述されてある、遇斯光と言ひ見此光明と言ふは、次の聞其光明威神功德と同意義で、聞も見も汎爾の聞見では無い、無量壽佛の光明は十方無量刹土を照破して能く三垢を消滅し勤苦を解脫せしむ、小經の光明無量照十方國無所障礙の謂である。而してこの光德は唯佛一人で無く、衆生も亦同樣の功德を得る、若有衆生聞其光明以下の說がこれである、宋譯の願文には所有衆生令レ生二我刹一一切皆得二無邊光明一とあり、知るべし。善導の釋に諸佛所證平等是一若以二願行一來牧非レ無二因緣一然彌陀世尊本發二深重誓願一以二光明名號一攝二化十方一と、光明の優劣は別願因緣の果用である、若し自境界を言はゞ何れの佛か差降あらん、優劣は攝化の別用に就くものなり。

壽命の德を明かす中、知其限極までは本佛の長壽を說き聲聞菩薩等は其の德聖衆に及ぶことを明す、因願に眷屬長壽の願あり。小經の名義段また及其人民の德を擧げて、壽德を明してある、主德の伴に及ぶものである。凡そ光明無量は化益の十方に無礙ならんが爲で、壽命無量は化益の三世に無終ならんが爲である、法王善住持は壽命無量に非ずんば出來ない。然るに支那の諸師は、この無量は有量の無量で眞の無量では無い、故に經に觀音の次補佛處の相が說いてあると言ふ。觀音の次補佛處のことは、樂集所載の『觀音授記經』のみで無く、此經の異譯漢吳の兩本には明かに載つてある、漢譯には無量淸淨佛至其然後、般泥洹者、其廬樓亘菩薩便當二作佛摠領乃至其次摩訶那鉢菩薩當復作佛等とあり、吳譯も亦同じ、これ阿彌陀佛涅槃の後觀世音菩薩之を次ぎ、又其涅槃の後大勢至菩薩之を次ぐとの說である。この經說に依りて有量說を立つるのであるが、同經の次上には明かに無量淸淨佛尊壽劫後無數劫常無史無二般泥洹時一也と說いて入涅槃の時は無いと斷言してある。元來報身佛に壽量の有るべき筈が無い、應化身にして始めて長短の壽量を見るべきである、報身に入涅槃の相あらばこれ示現のみ、卽ち應化身の分齊である、この事は樂集の釋に明了である。

次に眷屬無量の德を明すに、先づ大德の徒衆其數量り難きを言ひ、次に成道初說法の會座に不可稱計の聲聞菩

薩ありしを說く、蓋し無量永劫宿願の繫る所其數無限なるを以て、多數の來會あるは勿論である。

【國土功德】國土の功德を明す中、又其國土七寶諸樹より音聲之中最爲第一まで寶樹莊嚴を說く、七寶合成の相は文に在りて明なり、道場樹の四百萬里は高祖判じて化土の相とす、數量に卽して無數量に達する能はざる少功德者にありては則ち四百萬里に局る、これ化なり、すべて數量を說くは報土の當相に非ず、故に七寶講堂道場樹一括して之を方便化身の淨土と判ぜらるゝのである。又講堂精舍より覆蓋其上までは堂舍莊嚴、內外左右有諸浴地より是故其國名曰安樂までは寶池莊嚴を說いてある、寶樹でも寶池でも種々に佛事を爲すところが、有漏の依報と反對で、有漏の依報は悉く煩惱隨增の對境となる、所謂無漏の依果不思議なる德相である。阿難彼佛國土諸往生者より百千萬億不可計倍に至るまでは、往生人の德相を擧げて安樂の國德を嘆ずるのである。安樂國は無爲涅槃界である、故に往生するもの無爲涅槃に入る。『論註』の釋に願往生者本則三三之品今無二一二之殊一亦如二淄澠一味一とあり、大小凡聖一切善惡の往生者、安樂國に入れば智慧高明神通洞達咸同一類となる、而して皆自然虛無の身無極の體を受くるのである、虛無之身無極之體とは、相好殊妙の身卽ち無爲法性にして、不生不滅三世に盡くるなきを謂ふ、無上涅槃の極位である、『證文類』この文を引て眞實證を明し給へり、最も着眼すべき說相である。貧窮乞人と帝王の例は聖衆相好の殊妙を明す、其他文相は解し易し。佛告阿難無量壽國以下は重ねて種々の依報莊嚴を說けり、衣服飮食等の具備せる、宮殿樓閣の聖衆大小の身形に隨て隨意に高下大小ある、衆寶妙衣の莊嚴せる、德風の妙音德香を出す等皆な如意自然の相である。又衆寶蓮華より下は華光の德相を明し、光中より三十六百千億の佛身を出して、十方に微妙法を說くことを說く、依報莊嚴忽ち光中に無量諸佛を現じ說法度生す、眞に依正不二なるものである。楞伽經の十方諸刹土衆生菩薩中所有法報身化身及變化皆從無量壽極樂界中出の說に對照すれば三世十方の佛皆これ極樂界華光出佛の相である、口傳鈔の彌陀を以て報身如來の本體と定むるの判またこゝに基くか。蓋しこれ大願業力の所成、法王善住持力の致す所にして、言語の及び難き妙境界相である。

第五章　衆生往生分

佛告阿難其有衆生生彼國者皆悉住於乃至　卽得往生住不退轉唯除五逆誹謗正法

阿彌陀如來果成の德相の中、下卷の初より百千萬劫不能窮盡までは衆生往生の因果を明す、その中で東方偈の終までは往生の相を明し、その以後は往生の果を明したものである。往生の相を明かす中で唯除五逆誹謗正法までは眞實三願の成就を明して念佛往生の相を明し、次に三輩章は十九願の成就を明して諸行往生の相を明し、佛告阿難無量壽佛威神無極以下は諸佛國の菩薩往覲を明す。

【三願成就】初に念佛往生の相を明す中、有衆生より及不定聚までは、十一願成就の相にして先づ其の果を標する、生彼國者皆悉住於正定之聚とは唐譯にては皆悉究竟無上菩提二到二涅槃處一とあり、宋譯にては是人決定證於阿耨多羅三藐三菩提とありて滅度の果を擧げてある、今經の文も正定聚とあるも正定とは正しく滅度に定まるの謂なれば、矢張必至滅度のことである。但し廣門示現に約して五果の次第を見る義邊では彼土正定聚を施設する、論註の釋は此の義邊に由る、略門の實義に居して初生卽極を談ずる義邊では、正定聚は此土の德相となる、高祖はこの義邊に由りて、生彼國者の文を彼國に生れんとするものはと訓じて、現益とする。所以者何彼佛國中等は

邪定不定聚無きが故に必ず正定聚にして滅度に至る者のみであると反顯する、唐譯では邪定聚及不定聚不能了知建立彼因故とありて、邪定不定の往生せざる所以を明してある。之を要するに必至滅度の願成就の相で、上の文の智慧高明咸同一類の證果を標したものである。次に十方恒沙諸佛如來皆共讚嘆無量壽佛威神功德不可思議とは、第十七願成就の相にして、次の諸有衆生聞其名號の所聞を擧げた說相である。この諸佛讚嘆は、上章の華光出佛說微妙法の說相に連りて言ふべからざる妙味あり、十方とは橫に約して、竪の三世を攝す、卽ち三世十方の諸如來出世の本懷として、彌陀法を讚嘆し給ふこと、我が釋迦牟尼佛に同じく、法界到る處弘願法の聞かざる所は無い、小經の說卽ちこれである。これ第十七願成就の德相である。威神功德不可思議とは三種莊嚴の一々皆盡く不可思議である、而して之を該攝すれば一の嘉號である、論にはこれを略入一法句と說く、諸佛の讚嘆之を卷けば六字の寶號これを開けば因位の萬行果地の萬德、阿彌陀如來本願の生起本末に亘る、而して皆攝受衆生の德相である。次に諸有衆生より下は十八願成就の相にして、正しく念佛往生の相狀を說くものである、これ卽ち上の諸佛讚嘆に對する能聞の相にして、また諸佛稱讚の理由になつてある、唐譯ではこの兩願成就の間に何以故の三字がある、聞名の者、斯る大益を被るが故に、諸佛稱讚ありといふことになる。諸有衆生とは本願の十方衆生で、一切の有情を指す、聞とは『信卷』の釋に、經言聞者衆生聞二佛願生起本末一無レ有二疑心一是曰レ聞也と、其名號とは諸佛所讚の名號、名號の威神功德不可思議は卽ち佛願の生起本末である、信心歡喜とは『寶章』に信心定まり

ぬれば淨土の往生は疑なく思ふて喜ぶこゝろなりとあり、唐譯には淨信と譯して淸淨心の義を顯はす、本願力廻向の信心なるが故に、淸淨心の義がある。乃至一念とは『信卷』の釋に一念者斯顯二信樂開發時刻之極促一彰二廣大難思慶心一也と、又言二乃至一者攝二多少一之言也言二一念一者信心無二二心一故曰二一念一是名二一心一一心則淸淨報土眞因也とあり、時刻と信相との二釋を設けらるゝも、乃至十念に對すれば時刻の極促を顯はすを當面の義とする、十念は相續を顯はし一念は極促を表した言である。至心廻向とは凡夫自力の至心廻向に非ず、如來永劫成就の至心廻向を須るなり、下の經文には明信佛智乃至勝智作諸功德信心廻向とあり、自力の作諸功德に非ず、佛所修の功德である、故に衆生よりして言へば不廻向で廻向は佛にある、高祖「せしめたまへり」と訓じてこれを佛力に歸し給ふもの誠に大權の妙釋である。願生彼國とは願文では欲生我國である、如來招喚の勅命によりて往生を願求する作得生想である。『證文』の釋に「至心廻向といふは至心は眞實といふことばかり、眞實は阿彌陀如來の御心なり、廻向は本願の名號をもて十方衆生に與へたまふみのりなり、願生彼國といふは願生はよろづの衆生本願の報土へむまれんとねがへとなり、彼國はかのくにといふ安樂國をゝしへたまへるなり」とあり、他力の義明了である。卽得往生住不退轉とは『二卷鈔』には信受本願前念命終、卽得往生後念卽生とありて、卽時入必定の意義である、現流梵本には「念を發起せば無上正等覺に不退轉の位に住す」とありて、信卽時の益となつてある。高祖が「すなはちとき日をもへだてず正定聚のくらゐにつきさだまるを往生をうとはのたまへるなり」と釋して、信一念の卽時入必定の益と定めらるゝもの、明に經意の至極である、不退轉は卽ち正定聚なり、この益の廣略の所談は前述の通りである。唯除五逆誹謗正法とは、除とは抑止の義で永除の義に非ず、廻心すれば則ち攝取する、『論註』及び『散善義』の釋の如くである。以上三願成就の文具さに念佛往生の相狀を明かして、一經至要の關節と爲りてある、上卷所明を此に一結して、而して下の往生の果相及び釋迦指勸の廣說を引起することになる。

佛告阿難十方世界諸天人民其有至心乃至亦得往生功德智慧次如中輩者也

【三輩章】次に十方の諸天人民が彼國に生れんと願ふものに大別して三通りある、その上輩は斯く斯く、中下輩は斯く斯くで往生するといふが三輩章の所說である。然るに諸師の釋では多く、前の諸有衆生卽得往生の根機を細分したものと定めて別類の往生とは見ぬ。祖承の釋にも凡そ兩樣に爲つてある、一には念佛往生の根機の分類を明したものとする、これは先づ鸞師は三輩生中雖二行有二優劣一莫レ不二皆皆發一無上菩提之心一乃至願生彼安樂淨土者要發無上菩提心也と釋して同じく一無上の信心に由ると定め、次に善導大師は『觀念法門』に此經下卷初云佛說二一切衆生根性不レ同有二上中下一隨二其根性一佛皆勸二專念無量壽佛名一等と釋して、同じく念佛往生のものと定め、源信和尙之を相承して『要集』に雙卷經三輩之業雖レ有二淺深一通皆云二一向專念無量壽佛一と釋し、吉水また之を相承して詳釋せられてある。鸞師は信心に約し、善導等の諸祖は念佛に約するの差で共に同一念佛往生に就て釋してある。高祖に在りては之を承けて信卷に橫超の菩提心を釋する下に『論註』の釋を引用し、また願成就

の一念を釋するに同じく註の釋を引て結成せられ、また『行卷』に往生要集の前記の釋を引用せられ『傳繪鈔』によれば平太郎への教示にも三輩一向專念の義を以てせられたりと見ゆ、これ一途なり。二には三輩章を以て諸行往生を明したものと釋する、これは源信和尚の諸行往生を釋せらるゝに觀經の九品を列ね雙卷經三輩業亦不レ出レ此とあるもの、及び吉水の三義の內傍の義卽ちこれで、高祖聖人は之を稟承して橫出を釋して亦復有二橫出一卽三輩九品定散之敎化土懈慢迂廻之善也といひ、化身土卷には十九願成就として此願成就文者卽三輩文是也と判じ、往生文類には同じく至心發願の願成就として、三輩章を連行せらる、これまた一途なり。三輩章の所明は斯く一概すべからざる所に妙趣があるので、要するに廢立の敎意を寓したる說法なるが故に、兩面の見方が立つのである、高祖の三願三機の眞假の分別に居して十九の假願成就とするときは諸行往生の所明と爲る、而かも廢立の正意よりするときは、これ所廢の爲の開說にして、その要は一向專念の義に存する旨、祖釋明了である、意を得て解すべし。文相すべて如上の釋意によりて解釋せざれば動もすれば難澁である。諸譯また種々に異なつてある、而して漢吳兩譯では此下に胎生邊地の相が明してある、諸行往生の義邊に約したものである。

佛告阿難無量壽佛威神無極十方世界乃至必過要聞法會當成佛道廣濟生死流

【菩薩往覲】次に諸佛世界大菩薩衆の往覲を明かす一章は、諸佛讚嘆の相と諸大菩薩の皆弘誓に歸敬する相を示して、彌陀攝化の巨益を示されたのである。往覲とは往て見ゆるといふ字で往生とは文字に緩急あれども、眞報佛土に到りて眞報佛身を見るは、如何に上地の菩薩でも出來ることで無い、彌陀如來大願淸淨の報土には、大小聖人悉く如來の弘誓に乘ぜざれば到るべきでない、されば諸菩薩の往覲は皆これ其佛本願力開名欲往生皆悉到彼國の敎語を信受して、而して佛願に托して始めて到るべきである、故に往覲卽ち往生にして、自他諸方の飛化供養はこれ皆修普賢德の相である、穢土應化身の釋尊の會坐に諸菩薩の來詣するものとは同視されぬ。文の中長行には其相を略說し、偈頌には往覲の相を詳說してある、願我國亦然までは往覲供養の相にして菩薩種々の供養讚嘆を爲し、而して嚴淨土を見て我國も亦然らんと希求する。應時無量尊より專求淨佛土必成如是刹までは、菩薩の請問に應じて本佛の授記說法し給ふの相、諸佛告菩薩より還到安養國までは、諸佛讚嘆によりて諸菩薩の得益の相である、此章段は諸譯を對照するに頗る分ち難き字句がある、今は今經の偈文の儘に科節を分けて置く。本佛の說法は來集菩薩の志願を知見して、その智願智行の必ず成就すべきを決し給ふに在り、諸佛讚嘆の說法は、先づ往覲の益を示して、次に其因として其佛本願力開名欲往生と說く、これ諸佛國中の大無量壽經である。若人無善本より以下は、此經の難遇を說きて奉行を勸められた釋尊の勸發である、唐譯宋譯及び現流梵本では、若人無善本以下の偈は經末流通分に置いてある、長行に對照すれば其方が正當かも知れぬ、但しまた此處に在りて、遙かに經末胎化段以下の伏線となりてあると見ても差支は無い。宿善の無い者は經を聞くことが出來ぬ、有戒見佛の宿緣によりて初めて聞法奉行することが出來る、佛智は難量である、佛世は難遇である、若し見敬し大に慶

ぶものは佛世尊の親友である、設ひ滿世界の火をも過ぎて法を求めよとの痛切なる勸發は、下の勸發分の大要である。高祖の嘆釋に曰く噫弘誓强緣多生叵レ値眞實淨信億劫叵レ獲遇獲ニ行信一遠慶ニ宿緣一若也此廻覆ニ蔽疑網一更復逕ニ歷曠劫一と、今日宿福により弘願の妙法に値遇せるもの、自己の幸福を喜ぶと共に眞に求法の意に住せねばならぬ次第である。

佛告阿難彼國菩薩皆當究竟一生補處乃至略說之耳若廣說者百千萬劫不能究盡

【菩薩功德】此の一章は彼土の菩薩莊嚴功德を廣說して、往生の果相を明らかにしたものである。若し必至滅度の果相を言へば、虛無之身無極之體にして光壽二無量なるものである、今は廣門示現の菩薩莊嚴功德に約して往生の果を嘆ずる、故に總て因位勝進の行相である、光に優劣を見、機に利鈍を分つ等皆これである。この德相を說く中古釋にては八段に分てり、一に皆當究竟一生補處より度脫一切衆生までの文に、菩薩皆一生補處の極位を究竟することを明してある、この文相は全く二十二願文の成就である。二に阿難彼佛國中より命終轉化生彼佛國までの文に、聖衆の光明を明してある、聲聞の光明は一尋、菩薩の光明は百由旬、觀音勢至の光明は最尊第一で三千世界を照らすと說てある、これ全く莊嚴の施設である、二菩薩は此土より往生したことを說くは蓋し有緣を引く爲めである。三に阿難其有衆生等との文に、衆生皆三十二相を具足することを說く。四に智慧成滿より不可計無生法忍に至るまでの文に智德の殊勝を明かす。智慧神通根利得忍の四益が列ねてある。五に又彼菩薩より如我國也までの文に永く惡趣を離るゝことを明かす、菩薩の普賢行を修するに當り、神通自在にして常に宿命智を備へ惡趣に墮せざるを明したもので、易行品の彼國人命終設應レ受ニ諸苦一不レ墮ニ惡地獄一の釋この意である、然し隨類應同好んで惡世に出て惡趣の衆生を度することは、此限りで無いので除生他方等と除外例を設けてある。鸞師は示現同彼の文を示現同如大牟尼に作り、八相成道惡世を化することにしてある、これは還相攝化の最も勝れたるに就いたもの、『和讚』この意を承け「安樂國にいたるひと五濁惡世にかへりては釋迦牟尼佛のごとくにて有情利益はきはもなし」と述べてある。『論註』はまた法王善住持の德を明して若人一生ニ安樂淨土一後時意願下生ニ三界一敎ㇾ化衆生上捨ニ淨土命一隨レ願得レ生雖レ生ニ三界雜生水火中一無上菩提種子畢竟不レ朽何以故以レ逕ニ正覺阿彌陀善住持一故と釋してある、されば不更惡趣の願文は惡趣に生るゝことは出來ぬとのことではない。還相利他の妙用は全く自由である。六に佛告阿難彼國菩薩承佛威神より忽然輕擧還其本國までの文に、十方無量世界に飛行して諸佛を供養するに、意の如く華香幢幡等を得ることを明かす、諸佛所に詣して供養聞法することは菩薩の行儀である。七に佛語阿難無量壽佛より熙怡快樂不可勝言までの文に、常に本佛の說法を聞て快樂の無極なることを明かす。八に佛語阿難生彼佛國より百千萬劫不能窮盡までの文に、諸菩薩の行德圓滿の相を讚嘆せられてある、此中に我々所の執着を離るゝこと、無量の功德を具すること、自利々他、定慧等の成滿、諸力具足等を細說してある。委細は文に就て知るべし。結文には若廣說者百千萬劫不能窮盡とあり、佛の無礙辨を以てして百千萬劫に

も窮盡せずとあるは、聖衆の德相眞に不可思議なるに由るものである、上に佛德を嘆ずるに晝夜一劫尙未能盡とあり、主伴の德相共に不可說なるものである、蓋し涅槃妙境界の有樣は到底言辭を以て詮顯すべきものではない。

第六章　釋迦勸誡分

佛告彌勒菩薩諸天人等無量壽國乃至普慈哀愍悉令度脫受佛重誨不敢違失

【釋尊勸發】上來彌陀成道の因果、衆生攝化の作用を說き畢つたので、これより以下忍界の化主として、釋尊切に坐下並に未來の衆生を勸發し、往生を願求せしめ給ふ說相である。此中に三章あり、初に此界の穢惡雜染の相を說きて信心を勸發し、次に胎化二生を說示して信疑の得失を判じ、後に十四佛國の往生を擧示して結勸としてある。始より不敢違失まではその初節である。

無量壽國聲聞菩薩より壽樂無有極までは、先づ上章を受け彼土の樂相を略標して、速かに勤求すべきを勸め給へり、聖衆及國土の功德は上に說くが如くである、何故に早く勤精進に之を求めないか、之を求むれば必ず三界を超絕し去りて安養國に往生し橫に五惡趣を截斷することが出來る、忽ち惡趣を閉ぢて涅槃に到るべきに、さて之を信じ之を行ずる人が無い、彼國は他力自然の率く所である、世事を拋げ棄てゝも道を求めなくてはならぬ、極長生を獲て壽樂兩つなから無極であるでは無いかとの眞に痛切なる勸誡である、以下は此意を細說せらるゝので、然世人薄俗以下正しく濁世の相を示して苦心誨喩せられてある、この然世人薄俗と說かれた、然の一字は眞

に感慨無量なるものがある、無限の憾が此一字に表はれてある、斯くも求め易き横超の一道が今正に眼前に歴々たるに、然るに世人は唯不急の事のみを諍ふて居る、佛眼如何に見給ふであらう、深く感戴せねばならぬ。

【三毒厭捨】先づ然世人薄俗より甚可哀愍までは三毒の過罪を説きて厭捨せしめ給ふ、其中善惡之道莫能知者に至るまで貪欲の過を説く、無尊無卑無貧無富と指して、尊卑貧富皆錢財を憂ひて愁苦すること共に同じ、富者は有るを追ひ、貧者は無きに悲み、暫くも安き時なし、有田憂田等は富有の苦を示し、貧窮下劣等は貧困の悲を擧示せられたものである、而して兩者共に何の得る所も無く、身亡び命終れば終身の營々畢竟痛苦のみでは無いかとの誡である。次に世間人民より安所須待欲何樂哉までは瞋恚の過を示さる、父子兄弟中外親屬相敬愛すべきに、却て相憎嫉し相違戻して終に大怨と爲る、斯くて憤の結ぶ所相報復し、惡報の引くところ窈々冥々として久しく長じ、何故に道を求め無いか、何を賴みにして居るかとの誡である。如是世人不信作善以下は愚癡の過を示し給ひ、因果報應の理を信ぜず、曚冥抵突して經法を信ぜず、愛欲に癡惑せられて道を求めず、かくて哀愍思慕して解けず、生死窮已あることなきに至る、深く自ら思ひ計りて專精に道を行ぜよ、若し此儘で壽終らば直に惡道に入りて數千億劫にも出づる時あるべからずとの誡である。經文の説相頗る詳密、今日吾人日常の爲作を以てこの明鏡に對するとき果して何等の感があるだらうか、深く之を思はねばならぬ。

佛告彌勒菩薩諸天人等以下は、上に三毒の過罪を示して、此に正しく勸信し給ふので、不解經者可具問佛當爲説之までは佛の教誡、世間の事誡に前説の如くなるを以て、佛在世に於て勤精進に道を求めよ、如何か求むるかならば其有至心願二生安樂國一者可レ得二智慧明達功德殊勝一であるとの教語である、三毒の過罪に纏縛さるゝ極惡の凡夫も願生彼國の信心によりて、智慧明達功德殊勝を得る、眞に喜ぶべきの至である、この教語より逆見すれば上説の三毒の過罪は卽ちこれ正所被の機實を示し給ひしことゝなる。此に於て彌勒菩薩大衆に代りて領解を啓白せられた。彌勒菩薩長跪白言より心得開明までゝある、その結文は復聞二無量壽佛聲一靡レ不二歡喜一心得二開明一である、佛名を聞て心が開けたとの答である。そこで佛復重ねて教誨を詳にし給ふ、五百歳中受諸厄也までの説相がこれである、此中には先づ佛の出世は未度の者を度する爲なる事を示して、今經の苟且ならざるを明かし、次に彌勒其他十方諸天人民の生死の久遠なるを指示し、今世佛に値ふて經法を聽受し、佛力によりて信心歡喜するものなるを説き、而して今世に於て去行を修すれば一世須臾の間にして無量壽國に生るゝを示して横超の大益を明にし、終に疑惑中悔の邊地の往生を誡め給へり、周到なる經説である。この經説に於て補處大士の彌勒菩薩を拉して直ちに五道展轉の凡夫に同ふするもの、これ自力の全く功無きを示さるゝものである、願力成就の報土は他力廻向の大信に非れば寸分の價値を認めざるが故に、法雲地の大聖も極惡の劣機に擇ぶ所は無い、弘願法の對機としては同一のものである、この凡聖を同視するといふことは他力たる所以で、佛説の用意は誠に周到なものである。彌勒白佛言より不敢有疑までは上の重誨に對する彌勒の答啓である、等覺の大士如教奉行不敢有疑と

答ふ、一に明信佛智あるのみである、況んや底下の凡夫唯仰いで信ずる外はない。

【五惡五善】佛告彌勒汝等能於此世より受佛重誨不敢違失に至る章段は五惡五痛五燒の相を擧げて五善の奉持すべきを說いたので、此中、先づ不大爲惡爲可開化までは此土の修善を嘆ずる、次に今我於此世間作佛以下正しく五惡五痛五燒の相を廣說し給ふ。五惡の分別は各其の主なるものに就て第一惡第二惡と分けたもので各衆惡を具するは勿論である。第一惡には殺生を主とする罪惡、第二惡には竊盜を主とする罪惡、第三惡には婬佚を主とする罪惡、第四惡には口業の四過、惡口兩舌妄言綺語を主とする罪惡、第五惡には邪見より生ずる意業の三過貪瞋癡を主とする罪惡に就て業苦痛燒の相を說きたるものである。卽ち十惡を五段に分說されてある。是等罪業を恣にして敢て顧みる所無きは濁世の通相である、その招く所の果報は自然三塗無量の苦惱に非ずして何者が有らう、斯くて世々累劫出る期も無く、解脫を得ること實に難い、速かに五惡の繫繩を斷ちて五善の道を修せよとの誡を切々として重ねられた、その慇懃の佛意は文に在りて明である。然るにこの五善を勸め給ふに一心制意端身正行と說き、また一心制意端身正念言行相副等と說きて、三業の十惡を捨てゝ三業相應の眞實に歸し、以て度世泥洹道に至るべきを示し給ひ、頗る自力の斷惑證理に類したる語を用ゐられてある。凡てこの勸發の一章には數次斯る聖道法門に類する說相ありて、甚だ佛意の所在が分り兼ねるようであるが、これが大悲攝取を旨とする彌陀法と、悲化勸發を旨とする釋迦敎との寬嚴相待つ所以である。凡そ釋迦の勸發は普通因果の法則より說きて、終に他力に歸するの外なきを知らしむるのである、五痛五燒を脫るゝに五惡を去りて五善に就くべきは勿論である、然るにこれが出來ない、そこで他力の乘ずべき必要が分る、上文の其有至心願生安樂國者可得智慧明達功德殊勝といへる敎が卽ちこれで、衆惡を遠離することは願生安樂の外はない、願生安樂の者は自から智慧功德を成就すると勸めらるゝ、この意義は經文の前後を對照すれば明である。『論註』に佛三業を莊嚴して衆生虛誑の三業を治し給ふことを釋してある、『散善義』にも佛の所修を須ゐて三業を捨棄すべきを明してある、三業の相應は畢竟佛力を須ゆる外に途は無いのである。勸誡分の說相嚴重なることは、要するに此義理を示されたものである。

【勸誡止作】佛告彌勒吾語汝等より下は、重ねて五惡五善の止作を勸誡し、上の文意を約說されたもので、他方佛國の自然に修善の出來る處よりも、この惡世で善を修することは、殊に勝れてあると誨へられ、而して佛化世間に及びて能く自ら天下和順國豐民安の德あることを示して、衆生永く佛の經法を犯す勿らんことを結示せられてある。於是彌勒等は彌勒菩薩謹んで佛誨を違失せざらんことを答へられた。

【靈山現土】佛告阿難汝起更整衣服乃至明信諸佛無上智慧に至る章段は、胎化二生を說きて信疑の得失を示し給ふものである。上來彌陀如來の因願果成衆生往生の因果を說き、更に三界穢惡の相を示して慇懃に勸誡せられ終つたので、此に局面を一轉して現前に彼國の勝相を見せしめ、一切四衆の信心を堅固ならしむる、實に廣遠なる

化儀である、正にこれ觀經第七觀應聲即現の本佛を勸請し給ひしと同一である。經末の文に說此經法令見無量壽佛及其國土乃至無レ得下以二我滅度之後一復生中疑惑上とある。汝起更整衣服等とは佛、阿難に勅して彼佛を勸請せしめらる、此經には阿難の身業禮拜を擧げてある、漢吳兩譯には佛名を稱ふることを說いてある、大經に南無阿彌陀佛といふ明文は他には無い。卽時無量壽佛、放大光明等は本佛の威相を說く。此會四衆一時悉見等は一座の大衆悉く佛の神力によりてこの廣大の威相並に國土莊嚴を拜見せしことをいふ、思ふに一會の四衆前に釋尊の經說を聞き、今目前に彌陀本佛の大威相を見る、疑網一時に消散し歡喜無量なるものありしならん、漢吳兩譯には諸衆皆作禮稱名し歡喜踊躍した現狀が詳細に記述されてある、蹇者は走り、病者は起ち、愚者は慧に、婬妖瞋怒の者は慈心作善し、樂器は鼓せずして鳴り、婦女の珠環また自ら聲有り等と說き歡喜快樂不可言なりと說いてある。

【胎生化生】汝見彼國從地已上等の問答は、彼國の莊嚴を見、本佛說法の大音を聞き、また彼國の衆生に化生胎生あるを見ることを明かす、この胎化二生の說、漢吳兩譯にては三輩章中に說かれてある、宋譯にては意義全く別になつてゐる、宋譯は別に考ふべし。化生とは蓮華化生『淨土論』の如來淨華衆正覺華化生、『易行品』の信心淸淨者華開則見佛なり、報土往生の相である、胎生とは唐譯には含華を說き漢譯には邊城を說く、不見三寶の宮殿に留まるに名け、化土往生の相である、菩薩處胎經の懈慢界も亦同じで、說相には多少の異點あれど、化土の相は千差なるべき筈であるから和會を須ゐない。明信佛智の行者は直ちに報土に入り、疑惑不信の行者は化土に生れて不見三寶の厄を受くる、この化土に生るゝも全くこれ佛力の爲す所で、『覺經』には孤疑佛經復不レ信二向之一當二自然入二惡道中一無量淸淨佛哀愍威神引レ之去耳とあり、大悲の至極である、不見三寶は自ら招く災である。然るに疑惑不信の爲であるから、これを悔責して佛智に歸すれば直ちに佛所に往詣する事が出來る。この胎生の說相に就て『大經』では、全く三寶見聞の相は無いが、併し化土にはまた假の三寶を見ること無いではない、『觀經』所說定散所感の身土これである、不見三寶の胎生の說は眞の三寶に約したものと見ても、また化土一種の相と見ても可なるべし。文を分てば何因何緣彼國人民胎生化生とは彌勒の問、佛告慈氏若有衆生等とは佛の答、初に胎生の因果、後に化生の因果を明かし、復次慈氏等とは更に胎生化生の優劣を對顯してある佛告彌勒譬如轉輪聖等とは喩顯、佛告彌勒此諸衆生等とは合譬、如何に轉輪王の如き供給飮食を得るも、宮中に繫がれて居ては諸小王子は喜ばない、胎生の衆生亦如此、不見三寶を苦として悔責すれば報土に入ることが出來ると、彌勒當知其有菩薩等とは疑惑の失を明かして信心を勸め給ふのである、爲失大利の一句流通の爲得大利に對し、得失分明である。この胎化段の信疑決判は誠に淨土一家の燈炬である、信を以て主とすることは通佛法の常規なれども、殊に他力の宗義に在りては明信佛智の獨立である、各祖の勸信誡疑皆此經旨を承けたものである。

【十四佛國往生】次に彌勒白佛言世尊於此世界乃至我今爲汝略說之耳に至るまで十方佛國の往生を擧げて勸發せらるゝ、此中先づ此土の往生を擧げて不退菩薩と小行菩薩とを列ぬ。不退菩薩とは已曾供養無數諸佛とありて宿

因深厚の信心の行人なり、次如彌勒の言、覺經には以レ次如二彌勒一皆當レ作レ佛也とあり、皆當に成佛すべきの意である、信卷の釋、此文に就て眞如彌勒大士等の嘆釋あり。小行菩薩等の文、唐譯には餘菩薩由少善根生彼國者とあり、自力少善の菩薩である、胎生の機を指す。次に十三佛國の菩薩往生を列擧す、諸譯多少の不同あり。不但此十四佛國以下は他佛國を例示するなり。小經では六方諸佛の證誠を說き今經では十四佛國の菩薩往生者を說く、これ共に十七願成諸佛咨嗟の相、本願一乘流布の光景である、この說相を以て一經の正宗を結び末代を勸信し給ふもの誠に所以あることである。

第七章　流通得益分

佛語彌勒其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一切大衆聞佛所說靡不歡喜

【附囑】前來正宗分既に畢り、此經の殊益を嘆じて當來大士に付囑し、末代の流通を期す、これ流通分の說である。此中、其有得聞彼佛より如法修行に至までは、念佛の一法を嘆じて附囑するなり、大經釋に曰く於二十八願成就文一明二但念佛往生一來迎等願及三輩文明二助念往生諸行往生一由レ此諸修二往生行一者懷レ疑難レ決故至二流通一則廢二助念諸行二門一明二但念佛往生一也と、正宗の說には助念や諸行の往生もある、今念佛一法を讚嘆し給ふものこれ附囑の正意を示すものである。然るに今經には彌勒附囑といふ文要は無い、意味は勿論有る、文は如來會が最も詳である、聞名の巨益を擧げて今此法門附二囑於汝一應當二愛樂修習一と云ひ、汝阿逸多我以二此法門及諸佛法一囑二累於汝一汝當三修行無二令一滅沒一とも是故我今爲三大囑累一とも云ふてある。卽ち爲得大利の法門を以て彌勒に附囑し、後世永く奉行を絕たざらしむるのである、凡て經末の附囑といふことは大切な事で、觀經でもさうである、一經の着眼すべき要點である。【一念大利】其有得聞彼佛名號より無上功德までは念佛の巨益を讚嘆する、得聞彼佛名號は願成就の聞其名號なり、歡喜踊躍乃至一念は、如來會には能生一念喜愛之心とあり、これは信一念に

約す、祖釋にては就二稱名遍數一顯二開選擇易行至極一とて附囑の一念を指し、行一念に約せらる、蓋しこれ小利有上の諸行に選擇して大利無上の念佛を付囑するものなるが故に、行々相對の側に就て行一念と判ぜらるゝもの、これ黑谷上人の釋意に準ずるものである。但し信一念を以ては信樂開發の時刻の極促を顯はし、行一念を以ては選擇易行の至極を顯はすので、これ所談の左右である。爲得大利則是具足無上功德とは、如來會に之を詳にして彼諸衆生獲二大善利一、若於二來世一乃至正法滅時、當下有二衆生一殖二諸善本一已曾供二養無量諸佛一由二如來加威力一故能得中如是廣大法門一切如來稱讚悅可上等とあり、無上の大功德を具し一切如來の稱讚を被るのである。是故彌勒設有大火等は、斯る巨益なる法なる故に、三千大千世界の火をも過ぎて、此經法を聞きて信樂し受持すべしと勸めらる、信樂し受持すとは自信のみで無い、教人信も無論含まれてある、如來會には假使經二過大千世界滿中猛火一爲レ求レ法不レ生二退屈諂僞之心一讀四誦受三持書二寫經卷一、乃至於二須臾頃一爲レ他開示、勸令二聽聞一不レ生二憂惱一設入二大火一不レ應二疑悔一等とあり、他を導く爲にも亦大火に入りて悔るなかれとある、是卽ち報謝佛恩の大行である、和讚に報佛恩の爲に如來の廻向を弘布せよとあるもの此意である。所以者何多有菩薩等とは聞經を求めて得ざる多くの菩薩あるを說きて、前句の所以を示されたのである。佛言吾今爲諸衆生等とは今既に經法を說き且つ本佛及國土を見せしむ、我滅度に於て疑惑を生ずる勿れと誡められたのである。當來之世經道滅盡等とは諸經滅盡の後までも特に此經を留めて、遠く法滅の衆生をして皆利益を得しめんと說かれたのである、止住百歲とは覺經には唯、經道斷絕在二心所願一皆可レ得レ道とありて百歲と說かず、蓋し必ずしも百に限るには非ず。釋尊一代の諸經中、特に慈悲を以て威神力を加へ、此經を留止する所以は本佛の妙法を弘宣するの經典なるが爲である、選擇集特留章に釋する如し。如來興世難値難見等とは聞法受行の甚だ稀有なるを示す、一代諸敎既に難得難聞である、而して斯經の信樂受持は難中の難であると說きて信受を初め、而してまた斯經を說くの一大事因緣たることを示さるのである。之を次に受けて是故我法如是作如是說如是敎と說き給ふ、釋尊本佛の德海に住して斯經を說き給ふ故に我法と曰ふ、如是とは如實にして誤なきを謂ふ、如是作とは序分の現瑞等化儀、如是說とは正宗の彌陀法を說くを指し、如是敎とは釋尊慇懃の勸誡を指す。此句、如來會には如來所應作者皆已作之とあり、如來とは一切如來なり、斯經を說くことは一切如來の是非作すべき責務で、我は今已に之を作し終つたとの說意で、說經既に終りて滿足あらせられた言葉である。應當信順如法修行とは斯經最後の結勸、しかもこれ釋尊一代の結勸と見るべきものである。何となれば諸佛法門の眞髓は唯斯經に在り、斯經は一代諸敎の結示と云ふべきであるからである、寶章の所謂一切の聖敎といふも唯この南無阿彌陀佛の六字を信ぜしめんが爲である、若し斯經を信ぜざれば一代の化儀を畫餅に歸せしむるのである。如來會に同く如是廣大微妙法門一切諸佛之所稱讚、而棄二捨之一當下令汝等獲二不善利一淪二沒長夜一備中衆危苦上是故我今爲大囑累、當レ令二是法久住不レ滅、應勤修行隨二順我敎一と、深重の經意を仰ぐべきである。

【得益分】爾時世尊說此經法以下は斯經の得益を明かす、或は無上菩提心を起し、或は小果を得、或は不退轉を得て普賢行に住す、種々得益の不同がある。各譯の記述また具略がある、現流梵本及宋譯は錠光佛以來の因緣を記すこと上に述べた如くである。然るに彌陀法の得益として何故に斯く種々の區別ありやといふに、淨影の說では小乘衆生聞レ說二娑婆穢惡可レ厭深心厭離故得小果、大乘衆生聞二彌陀佛威德廣度一堅心願求故得二不退一とあり、蓋し機根一ならず得益同なるを得ざるは止むを得ぬことである。經末に得益を明すは利益を證明する所以である、爾時三千大千世界等とは現瑞、淨影の曰く如來化周爲レ增二物敬一故以二神力一動レ地放レ光作樂雨華と。佛說經已以下は大衆同喜を顯はす、論註に經始稱二如是一彰二信爲二能入一末言二奉行一表二服膺事已一と、何れの經でも起結は斯くなつてある。以上略して一經深意の萬一を拾つた譯で、勿論不可の點が多いと思はるゝ、同學諸氏の是正を待つ。

聖典講讃全集第十二回配本・昭和十年十一月十日
印刷・昭和十年十一月廿五日發行・編輯者宇野圓空・
發行者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎
印刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎